教育時評50

「真の学び」とは何か

森　敏昭

前回は、学校を「勉強」ではなく「真の学び」がなされる場所として蘇(よみがえ)らせることが重要だと述べた。では、「真の学び」とは、どのような学びなのであろうか。

1.「真の学び」の3条件

筆者は、「真の学び」の条件は次の3つだと考えている。

(1) 楽しいこと　「真の学び」の第1の条件は、それをやるのが楽しいことである。楽しくなければ、それは「真の学び」ではなく、強いて勉める「勉強」なのである。前回に紹介した第3回国際数学・理科教育調査の結果に如実に示されているように、我が国の児童生徒は「教科嫌い」の割合が諸外国に比べて非常に高い。つまり、我が国の児童生徒にとって、学校は楽しい場所ではないのである。したがって、学校を「真の学び」がなされる場所として蘇らせるためには、何よりもまず、学校を「楽しい場所」にすることが大切である。では、楽しければ何でもよいのだろうか。もしそうであれば、話は簡単である。学校を遊園地かゲームセンターに変えてしまえばよいのである。しかし、楽しいだけでは「真の学び」とは言えない。

(2) 心の成長につながること　「真の学び」の第2の条件は、「心の成長につながること」である。例えば植物は、種から芽を出し、茎を伸ばし、葉を茂らせ、やがて花を咲かせて実を結ぶ。こうした植物の成長は、葉緑体の働きに支えられている。すなわち、植物は、地中に根を張り、成長に必要な養分(無機物)を土壌から吸収し、太陽光線を利用して光合成を行う。植物の成長は、無機物を有機物に変える、この葉緑体の神秘の働きに支えられているのである。一方、進化の過程で葉緑体を失った動物は、他の生物を捕食するという生存戦略を採用した。つまり、動物は「食べる」ことによって成長する。しかしながら人間は、植物や他の多くの動物たちとは異なって、体だけでなく心も成長する存在である。それでは、人間の心の成長は何によってもたらされるのであろうか。その答えは、もちろん「学ぶこと」にほかならない。体の成長が食物を「食べる」ことによってもたらされるのに対し、心の成長は知識や技能を「学ぶ」ことによってもたらされる。しかも心の成長は、生涯にわたって継続する。生涯学習の重要性が叫ばれる所以(ゆえん)は、まさにこの点にある。

以上の説明で明らかなように、心の成長につながらない学びは「真の学び」とは言えない。では、今の学校での「勉強」は児童生徒の心の成長につながっているのであろうか。おそらくその答えは「ノー」であろう。もしそうだとすれば、学校を「真の学び」がなされる場所として蘇らせるための必要不可欠な条件は、学校を「心が成長するための場所」にすることである。

(3) 将来に役立つこと　「真の学び」の第3の条件は、「将来に役に立つこと」である。そもそも学びとは、将来の目標(「なりたい自

分」)を目ざして伸びていく自己形成の営みにほかならない。したがって、心の成長につながる「真の学び」とは、換言すれば「学校で学んだことは、将来必ず自分のためになるのだ」と、児童生徒自身が自ら納得できるということである。ところが従来の学校の勉強は、それが自分の将来にどのように役立つのかが、はなはだ見えにくい。このため児童生徒は、「試験でよい点を取るためだからしかたがない」と、自分自身を無理矢理納得させるほかはない。そして親や教師の期待にこたえるために、ひたすら無味乾燥な知識を詰め込むのである。しかも、そのようにして無理矢理に詰め込んだ知識のほとんどは、試験が終われば直ちに剝落(はくらく)してしまい、結局は自分の将来のために役立つことはない。そうした無意味な知識を詰め込むだけの受動的な学びは、決して「真の学び」とは言えない。心の成長につながる「真の学び」とは、学ぶことの意味を自ら納得し、自ら主体的に取り組む能動的な学びなのである。

では、そうした「真の学び」が成立するための条件は何なのだろうか。

2.「真の学び」を編み上げる3色の糸

「真の学び」とは、要するに一人ひとりの児童生徒が、それぞれの自己実現を目ざして伸びていく、自己形成（自分づくり）の営みにほかならない。そして、その自己形成の過程は、「3色の糸で個性という編み物を編み上げる過程」に例えることができる。

第1の糸は、「情け（なさけ)」の赤い糸である。つまり「真の学び」は本来、児童生徒の情念の世界から湧(わ)き上がってくる、「こんなことが知りたい」「あんな人間になりたい」「こんなふうに生きたい」などといった思いや願いを原動力にして営まれるべきものなのである。

しかし、思いや願いがいくら強くても、それだけで「真の学び」が成立するわけではない。現代社会に生きる児童生徒は、将来、市民として社会生活を営み、社会の文化的実践に参加しなければならない。したがって、児童生徒は、それぞれの将来に備え、学校での教科の学習を通して、多様な学問的知識の「基礎・基本」を習得しておく必要がある。つまり、さまざまな教科の学習の奥には、人文科学、社会科学、自然科学など、さまざまな学問の体系、すなわち「理(ことわり)」の体系がある。これが第2の青い糸（「理」の糸）であり、この青い糸と前述の「情」の赤い糸と繋(つな)ぎ合わせることが、「真の学び」の本質なのである。

学びを編み上げる第3の糸は、「和（なごみ)」の黄の糸である。自己形成の過程とは、自分自身の個性を自覚し、社会の中での自分の居場所を定位し、他者とのかかわり合いの中で自己実現を図っていく過程にほかならない。つまり、人間は他者という鏡に自分の姿を映すことによって初めて自分の個性を自覚することができるのである。したがって、自己形成（自分づくり）のためには、赤い糸と黄の糸を縒(よ)り合わせること、すなわち、他者に出会い自己に向き合う作業が不可欠である。

また、黄の糸は、赤い糸と青い糸を繋ぎ合わせるための不可欠な要素でもある。なぜなら人間は、他者と出会い、人の輪（ネットワーク）を作りながら、さまざまな事柄を学んでいくべき存在だからである。つまり、心の成長のためには、他者との心の交流を通して共に学び合うための、学びのネットワークが不可欠である。そして、そうした学びのネットワークを作り広げていくためには、他者に心を開き他者と心を合わせる、「和の心」が大切なのである。このため、そうした学びのネットワークから切り離された閉鎖的な心は、やがて頑(かたく)なになり、心の成長も止まってしまうであろう。

(もり・としあき＝広島大学大学院教授)